

「死にたくないというあなたへ」 マタイ 28：1～15

I 導入部

おはようございます。2018年度の最初の礼拝です。今日は、イエス様が十字架にかかり死んで、墓に葬られ、三日目によみがえられたことを記念するイースター（復活祭）礼拝です。2018年度の最初の礼拝をイースター礼拝として、愛する皆さんと共に、私たちの救い主イエス様を賛美し、礼拝できますことを感謝致します。

青葉台教会では、毎年受難週には、連夜祈祷会が月曜日から土曜日まで持たれていました。私が2001年に来てから、16年間続けられてきました。けれども、今年は、連夜祈祷会をやめて、夜の聖餐木曜日礼拝と朝の聖金曜日礼拝をすることにしました。イエス様が弟子たちと心から待ち望まれた最後の晩餐での食事と洗足を覚えている夜の礼拝、イエス様が十字架につけられていた時間、イエス様の苦しみを覚えながらの朝の聖金曜日礼拝、み言葉を読み、賛美を歌い、聖餐の恵みに預かる礼拝は、どちらも本当に素晴らしいものでした。参加された方々は、その祝福を体験なさったのだと思います。できましたら、来年も継続したいと思いますので、来年はぜひ出席して下さい、素晴らしい恵みに預かること間違いなしです。

今日のイースター礼拝は、マタイによる福音書28章1節から15節を通して、「死にたくないというあなたへ」という題で、お話ししたいと思います。

受難週の中で経田姉の死もありましたが、死というものは、私たち人間にとっては、悲しいものです。嘆きべきものです。愛する者との死別は、胸が張り裂けそうな苦しみ、嘆きを私たちは経験するのです。経田姉は、死に対する備えができていました。クリスチャンとして、しっかりとした信仰を持っておりました。けれども、やはり、心の底には、愛する者と離れたくないという意味では、死にたくないという思いがあったのかも知れません。それは、クリスチャン云々ではなく、人間として当然な事だと思うのです。まして、イエス様の十字架と復活、罪の赦しと魂の救い、永遠の命、死んでも生きる恵みを知らない人々にとっては、死は恐ろしいもの、考えたくない事柄ですから、死にたくないと感じている方々が多くいるのではないのでしょうか。死にたくない、つまり、死が怖いという方々には、イースターは福音なのです。死んで終わりの生涯ではなく、死んでも生きる道、天国の望みがあることを知らせたいと思うのです。

II 本論部

一、問題の中に介入される神

今まで死人がよみがえるということは、ラザロを除いてはあり得ない事でした。ですか

ら、死んだらおしまいです。祭司長や律法学者、ファリサイ派の人々は、イエス様が十字架につけられて死んだので、喜んだのです。これで、イエスについて行った人々が自分たちのもとに戻ってくるだろうと思ったことでしょう。イエス様は、十字架の上で確かに死んで墓に葬られたのです。

アリマタヤのヨセフとニコデモは、あまり時間がなかったのでイエス様の遺体に簡単な防腐処置しかできませんでした。そして、ヨセフの準備した新しい墓にイエス様の遺体を収めたのです。

1節に、マグダラのマリアともう一人のマリア（ヤコブとヨセフの母）が、墓を見に行ったとあります。彼女たちは、イエス様の十字架の苦しみと死を遠くから見守っていた人々でした（マタイ27:55-56）。また、イエス様の遺体がおさめられた場所、その墓を見て、そこに座っていたのです（マタイ27:61）。おそらく長い時間、墓の前で悲しみに暮れていたことでしょう。しかし、安息日にはいるので、彼女たちは仕方なく、帰っていき、安息日が終わって、次の日の朝早くに、イエス様の遺体に香油をぬるために墓に来たのです。

愛するイエス様がなぜ死ななければならなかったのか。人々を愛し、貧しい人々を助け、病んでいる者を癒し、苦しみの中にある人々に手を差し伸べたイエス様が、何の罪で死罪にならなければならなかったのか。彼女たちはイエス様の死を悼（いた）んだのです。

愛する者の死、その悲しみは深いものです。ですから、その御遺体がおさめられた場所に共にいたいという願いが強いのは当然です。彼女たちの今できる最大の事は、イエス様の遺体に香油を塗ることだけなのです。そして、それを実行するために墓にやってきたのです。

2節には、大きな地震が起こり、主の天使が墓をふさいでいた石を転がした。そして、その上に座ったとあります。マタイによる福音書以外の福音書は、石がすでに取りのけていたことが記されていて、地震が起こったことや主の天使が石を転がしたことは、マタイにしか記されていません。ルカによる福音書では、女性たちは誰が石を転がしてくれるのか、と話し合ったことが記されています。イエス様の遺体に香油を塗るためには、墓の入り口の大きな石を取りのける必要がありました。そして、彼女たちにはそれは不可能だったのです。

私たちには、心配事がつきません。自分の目的を果たすためには、自分にはできないこと、困難な事があるのです。しかし、聖書は、主の天使が石を転がした。その上に天使が座ったたるのです。私たちの人生には、できないと思われること、ダメダと思えることが多くあります。けれども、神様は、私たちの歩むべきその道において、必要な事は必ず果たして下さる。人間の不可能や思いを超えた状況を可能にして下さるのです。それは、彼女たちのイエス様に対する愛のゆえでした。今、進むべき道が閉ざされていても、イエス様に信頼していくなれば、イエス様は道を開いて下さるのです。

二、こわがらなくていいのです

墓を番していた者は、天使を見て恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった、と4節にあります。天使の姿は、稲妻のように輝き、衣は雪のように白かったと3節に記

してあります。ローマの兵士ですから頑強な者でしょう。しかし、天使の姿を見て恐ろしさのあまり震え上がったのです。遊園地にはお化け屋敷がつきものです。女性は好きですね。でも、男性はあまり好きではありません。恐いのには怖いと言えない。キャーと叫ぶことができない。案外、私を含めて男性は恐がりですから、お化け屋敷に入ったら、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになるかも知れません。

ここでの、番兵の見た天使はお化けではありません。神の使いです。稲妻のようだという表現です。主の天使は、栄光の姿をしていたのかも知れません。信仰のない者が見たら恐れ震え上がるのでしょうか。信仰には、量（はか）りがあるのです。ですから、番兵が見た天使の姿は、番兵たちの許容範囲を超えたものだったのでしょうか。パニックだったのです。番兵たちは、主の天使が現れ、墓の石を転がしたのを見たのです。

そして、二人のマリアも同じものを見たのでしょうか。5節、6節を共に読みましょう。「天使は婦人たちに言った。「**恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。**」

番兵たちが恐れ震え上がり死人のようになったのですから、女性たちもおそれたでしょう。声を出しておどろいたのかも知れません。ですから、天使は、「**恐れることはない。**」と語り掛けたのです。私たちの人生にも、信仰生活においても、恐れることはたくさんあります。信仰的な事、経済的な事、健康的な事、精神的な事、仕事、学校、教会、夫婦や親子、友人という人間関係、将来の事と恐れることは多くあります。今、恐れていることがありますか。聖書を通して、神様はあなたに語られるのです。「**恐れることはない。**」と。

女性たちは、十字架につけられて死んだイエス様の遺体に香油を塗りに来ました。しかし、あの方はここにはおられない。復活したというのです。しかも、「**かねて言われていたとおり**」と。イエス様は弟子たちに、何度か復活の事を語りました。しかし、彼らは信じませんでした。いや、信じられなかったのです。彼女たちも、聞いていたのかも知れません。しかし、人が死んで復活するということは、誰もが信じられないほどに大きな出来事なのです。復活したので、遺体は当然ないわけです。だから、見なさいと言われました。彼女たちは、十字架の上でイエス様が死んだこと、確かに、このお墓にイエス様の遺体が収められたことを見て知っていたのです。だから、「**遺体の置いてあった場所を見なさい。**」と告げたのです。うそでも、ほらでもない。真実なのです。真実はひとつ。何かアニメやドラマで出てくる言葉です。復活したことは事実なのです。

また、弟子たちに、「**あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。**」ということを告げるようにと天使は語ったのです。イエス様が復活して、ガリラヤで会える。それは、喜ばしい事でした。喜ばしい事ですが、素直に喜べないのが、復活の事実でした。神様のなさることは、私たち人間の頭では理解できません。私たちが理解でき、私たちの頭で信じることはできない神様なら、それは神様とは言えないでしょう。私たちが信じられないことをなさるから、神様なのです。

三、聖書を通して直接神の言葉を聞く

8節を共に読みましょう。「婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。」 彼女たちは、天使を見て恐れしました。イエス様の復活の事、ガリラヤで会えることを聞いて喜んだのです。リビングバイブルでは、「二人は、恐ろしさに震えながらも、一方ではあふれる喜びを抑えることができませんでした。」とあります。彼女たちの目的は、死んだイエス様の遺体に香油を塗ることでした。葬りの準備があまりできなかったので、悲しみの中でイエス様の遺体に香油を塗ることが彼女たちの慰めだったのでしょう。ところが、墓の石は転がしてあり、天使がイエス様の復活を告げて、イエス様が復活したことをお墓に遺体がないという証拠のゆえに、恐ろしさがあがりながらもイエス様が復活したという福音のゆえに喜びがあふれてきたのです。そして、急いで、この良き知らせを弟子たちに伝えるために道を急いだのです。

9節を共に読みましょう。「すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。」 道を急いでいる二人の前にイエス様が立ちはだかって、「おはよう」と言われたのです。ギリシャ語では、「カイレテ」という言葉ですが、元の意味は「喜びなさい」という意味だそうです。ヘブライ語では、「シャローム」という言葉です。確かに十字架で死なれたイエス様を見た。そのイエス様の遺体が墓に葬られるのを見たと確認した。死んで墓に葬られたイエス様が、今自分たちの目の前に現れて「おはよう」と言われたらどうでしょう。会いたかった人が目の前にいる。死んだ姿ではなく。生きた者として。どんなにうれしかったでしょう。喜びに満ち溢れたでしょう。彼女たちはイエス様の足を抱いて、その前にひれ伏したのです。彼女たちは、イエス様を礼拝したのです。

イエス様が直接語られました。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」 先ほどは、天使も同じように「恐れることはない。」と言いました。けれども、今度は、復活されたイエス様が直接に、彼女たちに向かって「恐れることはない。」と言われたのです。天使が語った時、恐れと戸惑いと共に喜びがありました。しかし、直接イエス様から「恐れることはない。」と語られて、疑いや惑いは吹っ飛んで、喜びに満たされたのです。イエス様から直接言葉をいただくことは幸いなことです。私たちには、聖書が与えられ、聖書を通して直接に神の言葉をいただくことができるのです。私たちには日々、いろいろな出来事があります。だからこそ、聖書を通して神様の言葉、イエス様の言葉が直接必要なのです。「恐れることはない。」という言葉が二人の女性に語られたように、恐れや不安でいっぱい私たちにも、イエス様が直接語られ、全てを受け入れて下さるのです。

天使もイエス様もガリラヤに行くように、そこでイエス様に会えると告げました。ガリラヤという場所は、イエス様や弟子たちの故郷、イエス様が弟子たちと共に神の国を宣べ伝え、奇蹟の業を起こし、み業をなさった場所です。弟子たちにとっては、イエス様のそばで聞いたお言葉に感動し、奇蹟の業に目を見張り、イエス様の弟子であることを喜んだ場所でした。ガリラヤという場所は、イエス様と共に楽しく、生き生きとした記憶のよみがえる場所です。弟子たちにとってかけがえのない場所、そこでイエス様に会えることは、

最高のことなのです。

私たちの教会は、今年で創立50周年を迎えます。この50年の間、神様は青葉台教会を通して、立てられた牧師先生を通して、信徒の兄弟姉妹を通して神様のみ業を見せて下さいました。多くの方々が救われました。今日も岡村成子さんが洗礼の恵みに預かります。イエス様が弟子たちにガリラヤで会うと言われたように、私たちは、この青葉台教会でイエス様に会えるのです。私たちの罪のために十字架にかかるほど私たちを愛されたイエス様、私たちの身代わりに十字架で裁かれたイエス様、死んで葬られよみがえられたイエス様は、この青葉台教会で私たちに出会って下さり、この教会で神の業をなさるのです。

Ⅲ 結論部

クリスチャンの中にも、自分は本当に天国に行けるのだろうかと疑っている人がいることを知ることがあります。残念な事です。なぜ、自分が天国にいけるかどうか、わからないかと言うと、自分の普段の生活がだらしないから、まじめでないから、ちゃんとしていないからという理由です。もし、そのような理由で天国へ行けないのなら、私は天国には行けません。だらしないし、まじめでないし、ちゃんとしていないから。しかし、聖書は、私たちの行い、生活の云々で救われる。天国へ行けるということを言いません。私たちが自分の心の中に罪があることを認め、その罪の身代わりにイエス様が十字架にかかって死んで下さったこと、死んで葬られ、三日目によみがえられたことを感謝して、受け入れるならば、私たちの罪は赦され、魂が救われ、永遠の命が与えられると聖書が約束していることを信じるなら、救われるのです。正しい行いや立派な歩みが救いの根拠ではないのです。

ぐうたらなクリスチャンであろうが、弱さを持つクリスチャンであろうが信仰によって救われ、天国へ導かれるのです。

死は恐ろしいものです。死は怖いものです。しかし、死では終わらないというのが、聖書の約束であり、イエス様に復活はそのしるし、証しなのです。しにたくないと思っているあなたも、死んでも生きる命、復活の命、天国の望みがイエス様の十字架の死と復活を通して与えられるのです。そのことを素直に信じたいのです。そして、そのことをお勧めします。この週も、いろいろな事があります。しかし、「**恐れることはない。**」と語られるイエス様の言葉を信じて、また、共におられるイエス様を信じて歩んでまいりましょう。

ユース礼拝 2018.4.1 「一発逆転」 マタイ28:1～10

I 導入部

イースター礼拝 今日第三礼拝はユースの方々の導きでの礼拝となりました。いつも第三礼拝に出席しておられる方々は、いつもと少し違います。

人生には逆転の劇 今甲子園で野球があり、今回は逆転が多い。九回ツーアウトから逆転劇が起こるまさにこのです。イエス様の復活は逆転劇なのです。

この世界にある苦しみや悲しみの中で、最も大きなダメージを与えるものは、やはり死ではないかと思えます。愛するものの死、これは強烈な痛みになります。

小学生のときのことです、私はバンビ飼っていましたが、ある雨の日にいなくなって帰って起案したが、熱を出して死んでしまいました。その時は本当に悲しみました。

死がもたらす悲しみ

小さな生き物でも、大切なものの死は打撃を与えます。愛する人たちの死は、これに比べることができません。家族の死、親族の死、友人の死、お世話になったかたがたの死。そのなかで多くの人たちの、死に向かうときの戸惑いと恐怖の顔を見ました。残された人たちの、どうしようもない打ちのめされた姿も、見ました。悲しみが気が変になりそうになった、そんな姿も見ました。これらの痛みは、決して一時的なものだけではないと思えます。

さて、ユネスコの調べでは、地球人口70億人のうち、一日で亡くなられる人の数は、だいたい15から18万人だそうです。そしてその人たちを取り巻く数倍、数十倍の人たちの悲しみが、毎日毎日、この世界にあふれているんです。

人間は死んで終わりではない

私は今まで、多くの方たちの死に出会ってきました。多くの、悲しむ家族の姿も見てきました。その中で、クリスチャンの方の死と、そうでない方の死とでは、少し違いがあると感じていました。

あるとき、クリスチャンではない、知人の看護師さんからこんな質問を受けました。「病院で、クリスチャンの方が亡くなられるときと、そうでない方が亡くなられるときでは、何かが違うように思うんです。家族さんも少し違うような気がするんですが、何か違いがあるんでしょうか、教えて下さい」。この方は、キリスト教系の病院にお勤めでした。ある先生は、「人間が、死んだらおしまいで何にも無くなってしまふ、とは考えていません。天国があると心から信じているんです。ですから、死は天国への入り口なんです。確かに、この世界で会えなくなることは寂しいことです。でも、本人も、残される家族も、天国で必ず再会できると信じているのです。ですからある方は、お先にね、と言って亡くなられます。また、See you again!(また会いましょう)と言って亡くなられる方もあるんです」。そうお話しすると、真剣に耳を傾けて下さいました。

聖書が語る死後の世界

イエス・キリストはあるとき、こう言われました。

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じるものは、死んでも生きるのです。」

死んでも生きる。なんてバカバカしいことを信じているんだらう。そんなのは絵空事だ、ごまかしだと思われると思います。日本人の多くの方は、人間は死んだら終わり、と。でも、本当に終わりなんでしょうか。聖書は、そうではない、天国があるといいます。どちらが正しいのでしょうか。

ゴールテープの向こうにあるもの

最近ではマラソンブームですね、東京や大阪、またいろんなところで、市民マラソンが大盛況です。人生は、よくこのマラソンにたとえられます。山あり、谷ありの42.195キロ。やっと走りきってゴールのテープを切った瞬間、もし、何もなくなり消滅するならば、その人は一体、何のために走るのでしょうか。テープの向こうに栄冠があり、また、そこで愛する人が出迎え、抱きしめてくれるからこそ、この長く苦しい道のりを走りきる意味と喜びがあるのではないのでしょうか。もちろん、走りきるプロセスが大切なこともわかります。でも、プロセスはあくまでプロセス。それが目的になるわけではありません。もし、ゴールのテープを切る瞬間に自分が消滅するならば、ゴールは目指すべきものではなく、ただの恐怖の瞬間でしかないはずです。消滅する瞬間が近づけば近づくほど憂鬱になるのは、当たり前ではありませんか。そして、自分を愛し、支えてくれた人たちが悲しみに打ちひしがれる瞬間でもあるんです。人生とは、そんなものでしょうか。わたしは、両手を挙げて、喜んでそのゴールを走り抜きたい。お先に失礼！って、笑顔で言い切って走り抜きたい。心から、そう思っています。

天国は本当にある

イエスは言われました。「人間は死んでも生きる」。では、どうすれば死んでも生きることができるのでしょうか。イエスは、言われています。「わたしを信じるものは、死んでも生きる」。イエスを信じるものは、死んで終わりではなく、天国があるんです。どうしてそんなことがあるのか。あなたが、ビルで火災に巻き込まれたとします。このままでは時間の問題。ある人が叫びました。「ここをまっすぐ行って非常口から出よ!」。そして、その言葉を信じ、従った人は助かり、生きます。別の人が叫びます。「どうしたって無駄だ。どうせここで全員死ぬんだ!」。それを信じた人は、死ぬんです。世界を変え、何十億の人たちに死の向こうにある希望を示し続けたイエスの言葉に、耳をかたむけて下さい。信じ、従って下さい。死んでも生きることができると。心からお勧めします